

音 楽 科

徳 田 典 子
笹 谷 真理子
西 村 真理子

1 音楽科における「考える子」

子どもは曲と出会い、関心をもつと、その音楽をもっと知ろうとする。

「楽しい、もっと聴きたいよ。」「この曲の素敵なのところは何なの？」「この曲の特徴は？」
そして、自分でも表現してみたいと考える。

音楽科における表現力を豊かに育んでいくには、子どもが思考・判断しているプロセスや結果を自分の言葉や音、音楽などで明確にしていくことが必要である。

「このように表したい」という音楽の表現に対する子どもの思いや意図は、言語活動などを通して、音楽の特徴を明らかにさせていくことが大切である。また、鑑賞においても「ゆったりとしていてちょっとさみしい感じがするよ。」「調が変化したところや歌詞の感じから楽しい感じがする。」などのように、子どもが自分の考えの根拠をもって、思考・判断したことを言葉で表す力が大切である。

ここでの「考える」とは、その音楽のよさや価値を実感させてくれるのは何かを感じ取るために、音楽に主体的に働きかけ、思考・判断し、試行錯誤することである。このような表現活動をくり返すことで「考える子」が育まれる。子どもが音楽科を通じて、主体的に言葉や音を使って考えることができれば、学習した技能や表現は生きてはたらく力となり、子どもの音楽的な感受性を高めることができるであろう。

このことから音楽科における「考える子」を次のようにとらえる。

よりよい音楽を追求するために 音楽のよさや価値を実感させてくれるものは何かを
思考・判断し 試行錯誤しながら わかったこと 感じ取ったことをもとに 言葉や音楽を
使って表現し 音楽的な感受性を高めていく子

2 学ぶ楽しさを味わう音楽科の授業

子どもが音楽とふれるとき、今まで学習してきた知識や経験によって、その音楽を同化し調整させていくことで、情意的変化がもたらされる。そこで、感動やあこがれをもつ音や音楽と出会い、知的好奇心に刺激を与えていく。その音楽の本質に気付いていく中で得られる楽しさを求めさせたい。

また、子どもは友達とのかかわりの中で、音楽のよさを共感したとき、楽しさが変化し、深まる。その音楽を認識することは、技能に影響を与え、表現力が高まる。そのためには、友達とのイメージの違いを発見させることや音楽を共につくる経験などを多く積み、友達とのかかわりによって生まれてくる楽しさを経験させる必要がある。

さらに、子どもは今までできなかったことができた時、喜びが生まれる。音楽表現できる喜びには、基礎・基本の技能の習得が必要となる。そのことは、子どもの意識と表現との統一をさせていく上で重要である。難しそうなことに挑戦して、できるようになることや苦労してやっとできた成就感などを味わわせる楽しさには、子どもが自分の成長を認識し、実感できる手だてが必要となってくる。

音楽科の「学ぶ楽しさを味わう授業」ではこのような楽しさを意識した授業を構想する。子どもが感性を豊かにはたらかせ、主体的に活動に取り組み、楽しさを相互に関連させながら、音楽活動を展開していくことで、さらに音楽科における「考える子」が育まれる。

3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

子どもが感動や美しさへのあこがれをもつような音楽との出会いによって、その音楽のもつ表現から題材のめあてとなる音楽をイメージさせることにつなげたい。そのために、表現のよさが伝わるような演奏や映像と出合わせる。子どもは、曲との出会いの中で、さまざまな感じのイメージや思いを抱く。「すてきな曲だな。」「この部分が好きだ。」「楽しい。」「まるで〇〇みたいだな。」など、感動があり、あこがれを感じさせる音楽は、子どもの心の琴線を大きく揺さぶり、表現しようとする意欲を高める。

また、授業の中での仲間との響き合いや他の学年との音楽体験は、心地よい感動がつくり出され、仲間や上級生などへのあこがれを抱く。さらに、本物の生の音楽を体感させたとき、より美しいものを求めていこうとする行動力や思考力が生まれる。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

子ども一人一人が意欲をもって音楽活動に取り組み、表現力を育んでいくためには、音楽表現に対する互いの思いや意図を言葉や音で交流することが大切である。

「どうしたら、こんなに美しい演奏になるの?」「なぜこんなにわくわくするのか?」など、その音楽をつくっている根拠を、実際に演奏をして試す活動や、自分の表現の思いや意図を言葉で表す活動を往還して高め合っていくことが、豊かな表現力につながると考える。

鑑賞においては、自分の知覚・感受した曲の特徴や様々な音楽の多様性を、音楽の形づくっている要素と結び付けて言葉で表して交流することと、実際に楽曲のその部分を聴いて確かめることを往還することが、より音楽のよさを味わって聴くことの手だてとなる。

また、授業のねらいに応じて、様々な学習形態を工夫して、適宜取り入れることも表現の交流には肝心である。学習の質を一層高めるために、個別学習、ペア学習、グループ学習などの優れた点を意味付けて設定し、子ども同士が互いに思いを伝え合い、学び合う学習が充実することが大切だと考える。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

自分なりの思いをもって表現してきた子どもは、自分の成長をふり返ることで、新たな目標に向かって、さらに表現の工夫をし、新しい音楽をつくり上げていく。

試行錯誤してつくってきた表現を聴き合う場を設定することで、子どもの成長が自覚できるようにする。よさを認めてくれる友達からの意見や教師のアドバイスや励ましも有効に働く。音楽は視覚でとらえにくく、瞬時に消えていくため、録音を聴き直すことや録画したものを視聴することによって、はっきりとした変容が自覚でき、子ども自身の成長を認め合う重要な手がかりとなる。

また、子どもの意識が変容していくことを自覚させるために、音楽に合わせて体の動きで表現することや聴き取ったこと、感じ取ったことなどを、図や絵、ワークシートなどで表し、前時までの変容を可視化することも有効な手だてとなる。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

「リクエスト１２３！みんなで楽しく歌おう」の実践から

昨年、子どもが１年生として入学したときに配布された『歌はともだち』という歌集や教科書には子どもの興味がそそられる歌がいっぱいある。「あ、この歌知ってるよ！」という歌や「これ、どんな歌？」「歌詞がいいな。」「この旋律をオルガンで弾いてみたらすてきだったの。」「今月の歌をもう一度歌いたいな。」など、歌いたい理由もたくさんある。「歌ってみたい歌を１時間の授業に三人ずつ順番にリクエストしてみんなで歌っていこう！」という子どもにとってうれしい取り組みを４月からスタートした。

昨年からもたくさんの歌を歌ってきたが、すべて与えられた歌といえる。自分の理由で１

勇気 100 パーセント（７）
夢をかなえてドラえもん（５）
世界にひとつだけの花（４）
北風小僧の寒太郎（３）
明日という日が（３）
カントリーロード
蛍の光
上を向いて歩こう
ビリーブ
はじめの一步
手のひらを太陽に
にじ
赤いやねの家
いつだって
Tomorrow
シャボン玉
エール
大きな古時計
にんげんっていいな
おおブレネリ
ドレミの歌

資料１ リクエスト vol. 1 の歌

世界にひとつだけの花（５）
勇気 100 パーセント（４）
夢をかなえてドラえもん（３）
気球に乗ってどこまでも（３）
おおブレネリ（２）
にんげんっていいな（２）
喜びの歌
南の島のはめはめハ大王
にじ
ミッキーマウスマーチ
ちびっこカウボーイ
Tomorrow
われは海の子
森のくまさん
翼をください
はじめの一步
思い出のアルバム
ゆかいなまきば
ありがとう さよなら
すいかの名産地

資料２ リクエスト vol. 2 の歌

曲リクエストし、それをみんなに歌ってもらうことには喜びと責任がついてくる。「この歌をみんなで歌いたい！」という個々の願いは叶うが、歌う側にとってあまり乗り気じゃない歌がリクエストされたときも、歌が難しくてあまり歌えないときも、子どもはほとんど文句を言わなかった。また、人気のある曲は歌う頻度が高いが「またこれ？」とは言うのを我慢している様子がみられた。なぜならきっと、自分の番のときにみんなから同じことを言われたら嫌だからだ。リクエスト vol. 1（１周目）では、単に楽しいだけの取り組みと思っていたのに、実は楽しく行うためにはいろいろな思考や我慢が必要だということに、子どもはどんどん気付いていった。

vol. 1 のリクエストは、そんなふうにもわり終えた（資料 1）。ふりかえりを行うと「知らない歌を歌えてよかった。」「みんなでいろんな歌を歌えて楽しかった。」「季節外れの歌もあったよ。」「もっとたくさんの歌をおぼえたいよ。」などの意見が出た。そこで教師も「みんながリクエストをする歌の選んだ理由が知りたいな。」と意見を出し、「季節外れの歌はやめよう。」「みんなに選んだ理由を伝えよう。」という条件で vol. 2（２周目）をスタートさせた。

vol. 2 のリクエスト曲を選んだ理由には、大きくとらえて

- ・リズムに乗れる
- ・歌詞が心にひびく
- ・メロディが好き

の三つの音楽的要素があがった。歌う前にリクエストをした子どもがその歌のどこに音楽的な価値を感じているのか、ということについて音楽的要素を用いて確認することで、音楽的な価値をみんなで共有して歌うことができた。また選んだ理由には「幼稚園のときに歌った歌だから。」というものも多数あり、その都度「歌ったとき、どんな気持ちだったのかな？」「歌のどこでそう感じたのかな？」「歌のどんなところがそういう気持ちにさせたのかな？」と、掘り起こし作業が必要となった。流さずにじっくりと尋ねることで、最終的には音楽的要素にたどりつくことができた。周りの子どもだけではなくリクエストした本人も「理由はこれだったのか・・・！」

と納得する場面が見られた。しかし、資料2からも分かるように vol. 1 で人気だった歌が何曲か vol. 2 でもよく歌われている。リクエストされると「またこれ？もう飽きてきているよ。」という雰囲気が無言で広がっていた。自分のハートにぴったりなオリジナリティ溢れる選曲をする子どももたくさんいるが、「無難な」歌を選ぶ子どももいる。リクエストするということは自分の内面の一部をさらけ出すということでもあるし、選曲のセンスを問われる場でもあるので、なんとなく圧を感じていた子どももいたのだ。周りの友達と選曲が違っても、自分が好きな歌は好きと自信をもって好みを意思表示していいんだよ、と伝え続けている。

このように vol. 2 が終わって、ふりかえりを行い3周目をどうするか話し合った(資料3)。

教師：vol. 2 が終わったので、ふりかえりをしましょう。

A児：新しい歌がまたふえたよ。いっぱいいろんな歌が歌えて楽しかったです。

B児：季節の歌もふえて、季節を感じられてよかったよ。

教師：3周目はどうしますか？

全体児：やりたーい！！

教師：3周目は、vol. 2 と同じ条件ならば、しませんよ。vol. 2 は一人一人の選んだ理由をみんなで共有して歌いましたね。

C児：3周目はリクエストする人の個人的な理由じゃなくて、みんなが楽しめる理由をみつけて歌を選んでリクエストしたらいいと思います。

複数児：なるほどー。

教師：では、vol. 3 は曲の中の「みんなが楽しめる理由」をみつけてリクエストしましょう。

資料3 3周目の条件を決めるリクエスト vol. 2 のふりかえり より

9月からは、一人一人が歌の中に「みんなが楽しめる理由」をみつけてリクエストしていくことになった。子どもが歌の何を楽しめると思い、どんな理由をみつけていくのか楽しみだ。

リクエスト曲を歌うときの発声の質や音程の正確さ、また歌詞のグルーピングやフレージングについては、継続的に行っているウォーミングアップ活動の成果が少しずつ現れている。どんな歌でも頭声発声できれいに歌おうとするのではなく、歌詞や曲調またテンポなどを感じて、それに合った発声を選び表情豊かに歌うことができるようになってきている。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

「かえうたエントリー」の実践から

日頃から子どもが時々ふざけて替え歌を歌っているのを耳にしていた。せっかくつくるのだから「なんだかちょっとイケナイことをしている」という意識ではなく、ちゃんと音楽作品として扱い発表する場を設定しようと考えた。「真剣にふざけて」つくった替え歌のエントリーを受け付けます、と告知すると予想を遙かに超える数のエントリーがあった。臆せず嬉々として発表する子どもの姿を見て、ふだんの学級でのリラックスした様子がそのまま音楽の授業にも反映されているのを感じた。「非日常の場」で、そこだけ切り替えて「いつもと違う自分」になることができる音楽専科の授業と違い、学級担任の音楽は「日常の続き」でいつもの人間関係がそのままそこにある。替え歌はその子どもの日常や思いが抵抗なくそのまま表れる自己表出の場でもあった。授業の中に発表コーナーとして「かえうたエントリー」をきちんと位置づけ、音楽がある曜日の朝、エントリーを受け付けた。毎回5～6のエントリーあり、ソロからチームまで様々だ。最初はチー



資料4 ひとりで堂々と替え歌を発表しているようす

♪となりのかえる
 (となりのトトロ の旋律で)
 かえるが こーっさり
 池から ピョンピョンにげて
 トコトコと ほかの池まで
 こっそりお出かけ 楽しいお出かけ
 ふしぎなぼうけん始まる
 となりのかえる かえる
 かえる かえる
 おたまじゃくしの時には
 池で泳いでる かわいい かえる

♪パンを食べて歩こう
 (上を向いて歩こう の旋律で)
 パンをたべて あるこう
 かけらが こぼれないように
 思い出す メロンパン
 おいしかった朝

♪海風こぞうのなみたろう
 (北風小僧の寒太郎 の旋律で)
 海風こぞうのなみたろう
 今年も 海水よくにやってきた
 ザブーン ザブーン
 ザブブーン ブンブンブン
 泳ぐでござんす
 ザブブブブブブーン

資料5 みんなで歌った替え歌の例

ムで発表していた子どもがいつのまにかソロで発表していたり、ソロで発表している子どもが初めて発表する子どもによりそうように一緒に発表したりしている姿などがだんだん見られるようになった(資料4)。

替え歌の内容は、初めの頃は稚拙な感じで無理やり旋律に創作した歌詞を詰め込んでいたが、だんだん、元の歌詞と対比させて、字余りの部分をすっきりした形のリズムに置き換えることができるようになっていった。上手なリズムの置き換えの事例は、どんな言葉をどんなリズムに置き換えたのかを全体で確認した。また、季節感を出した内容や、自分の世界感を投影した作品も現れ、つくって楽しむ替え歌から聴かせるための替え歌へと変化を見せ、聴いていて共感できるところが増えていった。感想も初めは「つくれてすごい。」「堂々と発表していてすごい。」「おもしろい。」というものだったのが「すっきりしている。」「とてもわかりやすい。」「歌いやすそう。」「聴いていたら私も〇〇(歌詞の内容)したくなった。」とだんだん内容に踏み込んでいくものになっていった。「わかりやすい。」「歌いやすそう。」という感想のものは、みんなで歌って替え歌を味わう、ということもするようになった(資料5)。聴かせるための替え歌から、みんなで歌うための替え歌へとさらに進化がみられた。

子どもから「せんりつも自作でもいい?」と尋ねられることが増えたので、自作発表も認めることにした。しゃべっているのか歌っているのかわからないような作品にも「すごい、すごい!」と感想をもらえるので、なかなか自作の作品の質が上がっていかないが、旋律として認識できるものについてはピアノで旋律を「これでいい?」と確認しながら一緒に弾くようにしている。するとだれかがつくった旋律が軽く流行となり、それに他の子どもが替え歌を付けるという現象がすぐに起きた。子ども同士の音楽的ネットワークにおける伝達の早さに驚いている。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる 「ハンドサインで歌おう」の実践から



資料6 ウォーミングアップ活動(呼吸)

授業のはじめにウォーミングアップ活動を継続的に行っている(資料6)。そのなかに、ハンドサインを使った階名唱やハーモニーづくりの活動をおいている。階名のドレミファソラシに対応したハンドサイン(手のひらの形)があり、階名唱をするときに声と一緒に体の前に出した手のひらの形でも、歌っている音を示す。低い音は低い位置に、高い音は高い位置に手のひらをもってくるので、音高感がつかみやすい。子どもは聴覚と運動感覚と視覚の三つから、音や音の幅を認識して、聴いて・手を動かして・見て歌う。また教師は右手の音、左手の音、さらに歌っている音の最大3音を一度に示すことができる。

一学期はハ長調の音階をなるべく純正律を意識して歌ったり、ド～ドの1オクターブやド～ソの5度のハーモニーを教師とつくったりすることを行った。「右手はみんなが歌う音、左手は先生が歌う音を示すよ。息はなくなったら歌っている途中でも吸ってね。」と約束ごとを決めて始めた。教師が手で子どもの歌う音と教師が歌う音の階名と二つの音の幅（音高）を示しながら、自分の音を歌う。ユニゾンからスタートし、最初は1オクターブの幅の高低を入れ替えながら歌い、途中から5度も入れるというように学習を進めた。

初めは子どもの歌声がなかなかひとつにならず、またそれを認識することも難しかったが、だんだんと「音がばらばらだ。」とか「上がりすぎた（下がりすぎた）」と自分たちで判断・評価する発言が出てくるようになった。教師とのハーモニーづくりも、初めはなかなか歌いながら聴くことができなかったが徐々に慣れ、清んだ響きのハーモニーが歌えるようになってくると「今のひびきはきれいだったね！」と驚いたような表情を見せる子どもも出始めた。ふりかえりでも「前の時間はよくわからなかったけれど、今日はきれいにひびいているのがわかった。」とか「音がそろわないとき、響きがにごっているのがわかるようになった。」と自分たちの成長を発見し、喜び合う姿も見られるようになってきた。

今後に向けて

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

子どもはあこがれのリクエスト曲を選んだ理由から、曲の中に音楽的価値を見つけ、それを音楽的要素と結びつけられるようになってきた。二学期から「リクエスト123」は3周目に入る。3周目のリクエスト条件である、(自分も含めて)みんなが楽しめる理由を歌の中にみつけてリクエスト、というのは子どもにとってかなり難しいのではないかと考える。みんなが楽しめる理由、つまり曲のもつ音楽的な良さをみつけて音楽的要素に結びつけられるように、曲をまず、速さ・リズム・旋律・歌詞・全体の雰囲気などに分析する活動を取り入れていきたい。また、歌ったことのない新しい歌をリクエストする機会がなくならないように、「これはどんな歌かな？」という子どもの事前の相談も受けていく。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

替え歌の音楽的な質は少しずつ向上しているので、作品のよいところについて、具体的にどこがどんなふうに音楽的によいのかということ、子どもの感想をもとに楽譜や範唱で示していけると、作品をつくるときに「やり方」として反映されていくのではないかと考える。真剣にふざけることからスタートしたコーナーだが、子どもにとっての自己表出の場であり、そして音楽的な表現の交流の場となってきた。また、自作作品の質を向上させるために、旋律として認められるものを楽譜や簡易譜で書き残すなどして、視覚的にも作品として提示されることで、音楽的に創作する意欲を高めていく。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

体の無駄な力を抜いて腹式呼吸で息継ぎを行うこと、心地よい音程・自然で美しい発声で聴きながら歌うこと、清んだハーモニーをつくること、歌いながら聴くことなどを発声のウォーミングアップ活動として行っている。きれいな歌声を出せたり、揺れないでまっすぐ発声できるようになったり、今まで聴くことができなかった自分や周りの響きが聞こえたり、ハーモニーの質の違いに気付くようになったりなど、一学期には個々が成長を自覚できる場をもつことができた。二学期も長いスパンで成長を見守りたい。今後のハンドサインを使った階名唱やハーモニーづくりの活動は、読譜やリズム唱、そしてカノンと進めて基本的なソルフェージュ力と聴きながら歌う力を高めていく。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

3年生「リズムの重なりや組み合わせを楽しもう」～ムービンスター3編～の実践から

「リズムの重なりや組み合わせを楽しむ」ためにボディパーカッションを取り入れた。ボディパーカッションは手拍子や足ぶみ、ひざ打ちなど、身体から出る様々な音を使って音楽を奏でることである。友だちとかかわり合いながら、楽しくリズム感や拍感を養うことができる。また、音にこだわり、拍を感じながら単純なリズムをくり返し演奏する中で、重なり合うリズムや音の響きのおもしろさを感じ取ることができる題材である。

3年生の子どもにとって、身体の様々な部位を使ったボディパーカッションに取り組むのは初めてである。そこで、ボディパーカッションの様々な表現にふれさせるために、動画の映像を見せたり、実際に映像を見ながら身体を動かしたりする活動を取り入れた。

自分たちと同じ小学生が楽しそうに拍にのってリズムを打つ映像からは、違うリズムが重なり合う楽しさや身体部位による音色の違いのおもしろさを感じることができた。また、大学生がひざからお腹を16分音符で打ち、最後にジャンプする映像では、思わず立ち上がってまねをする子どもの姿が見られた。プロのパフォーマーによる、一糸乱れぬきびきびした動きのボディパーカッションの映像は、子どもの心をとらえたようで、食い入るように映像を見ていた。

子どもからは「初めて見た。」「楽しそうだった。」「やってみたい。」「見たら簡単そうだったけど、やってみたら意外に難しかった。」などの感想が聞かれた（資料1）。

実際の映像を見せたことで、ボディパーカッションの様々な表現や楽しさ、おもしろさにふれることができ、子どもの意欲につながっていった。

<p>みんなでそろっていました。体をぜんぜんつかって いました。たくさんやり方があって、かさ ねるとグチャグチャ「ゴ」と思ったけど、いい音 がでて、はやくしていいなと思いました。 やってみたら、むずかしかったです。でもはやくて、 むずかしくて、いい音でした。声をだしていい なと思いました。体のいろんなところをつか って、よかったです。からだぜんぜんいい音 な音を出して、体がかたくなった。</p>	<p>ぼくは、ボディパーカッションの映像をはじめて 見て、いろいろなことに気がきました。 一つ目はいろんな体の部分をつかっていて、手で たたくよりおもしろい音が出て楽しかったです。 二つ目は四つのグループが順番にとぎれずにやっ たり、いっしょにやっていたり、どちらもよかったです。 じっさいにやってみたらむずかしかったです。 三つ目は外国人がやっていて、音がしっかりして いました。とても力強く体をたたいていい音で した。カッコいいリズムでした。ぼくもあの人たち のようにやってみたいです。</p>
---	---

資料1 ボディパーカッションの映像を見た子どもたちの感想

2年生 鍵盤ハーモニカアンサンブルの実践から

自分ひとりで演奏する楽しみもあるが、友だちと互いの音を聞きながらいっしょに一つの音楽を作り上げていくアンサンブルは、子どもにとって大きな楽しみである。

「かえるのがっしょう」では2組に分かれてのおいかけっこ（輪奏）をいろんなバリエーションで演奏した（松田昌編曲 たのしい鍵盤ハーモニカより「かえるのがっしょう」発表会用アレンジ参考）。

このアレンジは一般的な2小節遅れから始まり、1小節遅れ、2拍遅れとさまざまな時間差のカノンが出てくる。また、伴奏もマイナーコードを使っていてCコードの響きとはちがった味わいがある。子どもからは「不思議な感じだ。」「おもしろい。」「追っかけられるのが来る！また来る！感じでドキドキする。」などの感想が聞かれた。

「聖者の行進」をアレンジした「オッとおぶないよ！」（松田昌編曲 たのしい鍵盤ハーモニカより）はメロディー、オブリガート、ベースの3パートに分かれた鍵盤ハーモニカアン

サンプルである。

それぞれのパートに楽しい歌詞もついていて、旋律も覚えやすく子どもは喜んで取り組んでいた。

練習をすすめていく中で、どのパートも欠かせない大事な役割であることや、楽しく演奏するためには曲に合った速さがあることを感じ取り、最後は楽しく歩きながら合奏をすることができた（資料2）。また、曲の冒頭に入るクラクションの音は、低い音は大きいトラックの音、高い音は小さいスポーツカーの音など、子どもの想像をふくらませ、鍵盤ハーモニカという楽器の音色の魅力にも気付くことができた。

音楽的価値のある楽しい題材との出会いは、子どもの表現したいという意欲を高め、心おどらせて演奏する姿につながっていく。



資料2 歩きながら楽しく演奏する姿

(2) 互いの思いを伝え合い 表現を交流させる

3年生「リズムの重なりや組み合わせを楽しもう」～ムービンスター3編～の実践から

ボディパーカッションアンサンブル曲「ムービンスター3」（山田俊之作曲）の前半部分は四つのリズムパターンの重なりや一斉にリズムを打つユニゾン部分からなる。子どもは前半部分から、たくさんの星（スター）が、きれいに瞬いている様子をイメージした。

後半部分は自分たちがイメージしたそれぞれの「スター」を、既習のリズムを組み合わせたり、音や動きを工夫したりして表現するアドリブ部分である。四つのグループでそれぞれ自分たちがイメージする「スター」を話し合い、それぞれ「ふなっしー」「サッカーナイト」「キャンディスイーツ」「きらきら星空」とした。これらの「スター」のイメージをリズム、身体の部位の違いから来る音色、そして動きの組み合わせを工夫しグループでボディパーカッションで表現していった。

一人一人の思いが出し合えるようにするために、1つのグループ（8人）をA、B二つのグループに分けた。4人での話し合いは、一人一人の考えや思いを出しやすく、自分の考えが反映された喜びを味わうことができたり、考えをまとめやすかったりしたようだ（資料3）。しかし、教師がさらにイメージに合ったいい表現にすることをねらって、AとBの表現を交流させた活動では、うまくまとまらなかったり、少々混乱が生じたりしたグループがあった。さらにいい表現にという教師の意図であったが、せっかく4人でまとめた表現をさらに変える必要感が子どもには薄かったようである。A、Bそれぞれの表現をつなぐという方法もあったのではないかと考える。



資料3 4人で話し合う姿

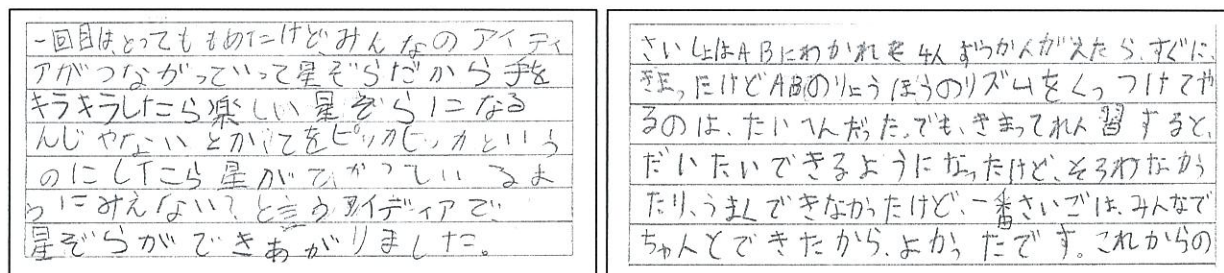
しかし、一生懸命考え話し合っていたグループもあった。それぞれの表現のよさを認め合ったり、「ここどうするの?」「〇〇って何?」という「問い」が聞かれたりした。話し合いの末、意見がまとまり、一つのリズムや動きができ、仲良くうれしそうに練



資料4 A、Bが交流する姿

習する姿も見られた。

難しい活動であったが、それぞれのよさを認め、考え、新たな表現を模索し、でき上がったリズムや動きをみんなで表現する楽しさを感じることができた（資料4、5）。



資料5 グループ活動後の感想

グループでリズムや動きを考えた後、それぞれのグループの表現を見合った。



資料6 イメージを表現するグループ



資料7 イメージとからめてよさを伝え合う場面

イメージに合わせてA、B 8人で話し合い工夫したリズムや動きを、子どもは楽しそうに発表していた（資料6）。

よさを感じ、さらに自分たちの表現に生かすことができるようにするために、イメージが感じられたところを伝え合った。

「身体全体を使ってジャンプしたところが、ふなっしーが飛んでいるようでした。」「手の動きが、星がちかちかしているようでした。」と、身体の動きからイメージを感じている子どもや「ブッシャーのリズムが動きに合っていました。」「ぴっぴっぴのリズムと手の動きが、とても合っていて星空のイメージでした。」と、動きとリズムをイメージとからめて伝えようとする姿が見られた（資料7）。

互いのグループのよさを見つけようとする姿、よさを認めてもらえてうれしそうな姿が見られ、表現を交流する楽しさを味わうことができた。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

3年生「リズムの重なりや組み合わせを楽しもう」～ムービンスター3編～の実践から

グループでの話し合いがまとまり、それぞれのグループでの表現ができ上がった頃、グルー



資料8 でき上がった表現を楽しむ姿

ープのまとめの表現を録画し、視聴する場を設定した。映像を見た子どもは、つくる過程で、もめてなかなかまとまらなかったリズムや動きがまとまり、拍に乗って楽しそうに表現する自分やグループの友達、他のグループの友達の様子を見て、自分たちの成長を感じていた（資料8）。

また、身体のいろいろな部位で音が違うこと、身体全体が楽器になることなどボディパーカッションの楽しさを新たに発見した子どももいた。

リズムや動きをつくる過程で、子どもは自分たちの動きを身体のどこを使って、どう動くかを考えていた。考えて少しずつできあがっていく手ごたえを感じていた（資料9）。

- ・ 体でいっぱい音が出せることがわかりました。それに動きやリズムを合わせるために、みんなでがんばって協力することもできるようになりました。わかることやできることも増えて、とてもいいボディパーカッションになったと思います。
- ・ みんなでやると、どんどんやっていくうちに楽しくなってきます。とくにみんなで作るアドリブ部分ができ、とてもうれしかったです。もっとやりたいです。
- ・ 手以外にも大きな音が出る部分があったので、びっくりしました。リズムにのって今まで思いつかなかった部分の音やいろんな体の動きを考えて、ボディパーカッションができるようになったので、「成長したんだな。」と思いました。一番できるようになったのは、リズムにのってできたことです。

資料9 学習を終えた後の感想より

今後に向けて

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

子どもが、「上手になりたい。」「もっと聴きたい。」「こんなふうに表現したい。」という意欲をもてるような題材を引き続き探していく。その際、子どもの実態に合わせることで、そして子どもたちにとって必要感のある題材や課題を設定していく。そのためには、子どもに「こう表現したい。」「こうなりたい。」というゴールのイメージを常にもたせることが大切である。

いい映像や演奏に触れさせることはもちろん、子ども同士の表現や音色の聴き合いの場をつくることでいい演奏や音色を聴き分ける力を育てていきたい。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現を交流させる

自分の思いや意図が音楽表現につながることは、「楽しさを味わう授業」には欠かせないことである。音楽表現をグループで高めていく場面では、一人一人の思いや意図が表現に反映されたという充実感を味わえるような学習形態を考えていく必要がある。

グループ学習では、授業のねらいによって効果的で適正な人数や編成を考えなければならない。また、考えや意図をどのように残していくのか、楽譜、ワークシート、ホワイトボードなどの教材教具の工夫も大切である。

そして、思いや意図が表現できるように十分に時間を保障することも必要である。

(3) 成長が自覚できる場を設け、変容を認識させる

成長が自覚できる場として、表現をお互いに友達同士で聴き合う場、そして録音や録画などで自分たちの演奏を確認する場を設定する。友達同士でよさを認め合う楽しみや喜びを味わうことができたり、映像を見て自分たちの成長をしっかりと確認したりすることができる。と考える。

また、日ごろの1時間の授業の中でも、授業の最初と最後で自分は何が変わったのかを発言やワークシートで意識させていきたい。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

4年生「拍の流れにのって リズムを感じよう」の実践から

この題材では，子どもにとってあこがれのドラムセットの奏法をマスターして，楽曲の拍の流れにのって演奏することを目指した。そのために，4月から授業の導入時に，リズムの基礎・基本の学習を取り入れることとした。まずはドラムセットを使ったリズムの聴き取り



資料1 リズムの基礎練習をしている様子



資料2 あこがれのドラムセット演奏を目指して高めあう姿

をして，聴き取ったリズムを記譜することから始めた。これは，ドラムセットの演奏のフィールインなどの音楽表現を，自分の考えをもって演奏していくための基礎と考えたからである。また，拍に合わせて，スティックを自在に演奏するために，スティックコントロールを始め，拍感を養う手だてをとった上で，ドラムセットの演奏の基本指導に入った(資料1)。

楽曲は拍の流れがとらえやすく，ノリが良いものを選曲し，指導に必要な要素を組み込んで，くりかえして練習ができるように配慮した。また，練習台や2台のドラムセットを使うことで，学習についての環境を整えた。そのことにより演奏量が多くなった。

ドラムセットを使用した音楽に感動やあこがれを感じさせるには，先に示したドラムセットの基礎・基本をおさえておくことが，その音楽に出合った時の感じ方やその後の影響に違いがでると考えた。ドラムセットの基本が実際に演奏できない状態では，どんなに価値の高い音楽や映像と出合わせても，その音楽や演奏の本質をとらえることが出来ないと判断したからである。

本題材で出会った音楽は，小学生のジャズバンドの演奏である。構成メンバーは4，5，6年生。主体は金管バンドで，演奏の中心に2台のドラムセットが配置され，内容はストーリー仕立てに構成されている。

主人公の4年生の kei 君は，ドラムセットでの演奏にあこがれて，クラブに入部するという設定で展開する。また，演奏の合間にストーリーがナレーションされることもわかりやすい。子どもは kei 君の気持ちに寄り添い，演奏のエンディングにある6年生との2台のドラムセットで，ソロ演奏をコラボレーションする姿にとっても感動していた。

この視聴によって，子どもは，リズムパターンを正確に演奏すること，ドラムセットを構成しているそれぞれの楽器の音色が，バランスよくブレンドされることなど，演奏をよりよくするための，奏法上の基礎・基本に立ち戻るようになった。また，特に，ベースドラムの奏法やハイハットのペダルの踏み方については，意識的に改善することに集中し，演奏をするようになった(資料2)。映像からとらえた演奏中のパフォーマンスなどは，この演奏を視聴したことから，自然な形で，自分の演奏に取り入れていた。

子どもにとって，特に印象に残ったことは，一台のドラムセットが，バンドの中心になって演奏し，その音楽を支えている点であった。子どもは，もし，自分が，このようなアンサ

ンブルに参加した場合、一人でドラムセットを演奏し、全体の演奏を支えなくてはならないと感じるきっかけとなった。バランスのいい演奏とは、リズムを正確に演奏すること、速度、強弱を意識し、ドラムセットの各楽器の音色をコントロールし、演奏することに、心がけることが大切だと感じていた。また、子どもは、映像の中の kei 君の姿にあこがれをもって見詰め、いつか、自分も kei 君の様な素晴らしい演奏ができるようになりたいという、思いや意欲が高まる出会いとなった。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

6 年生「駅メロディをつくろう」の実践から

この題材では、子どもがいろいろなイメージから得た発想を音楽として構成していくために、友達と互いの思いを伝え合う場を設定し、表現の交流をさせた。

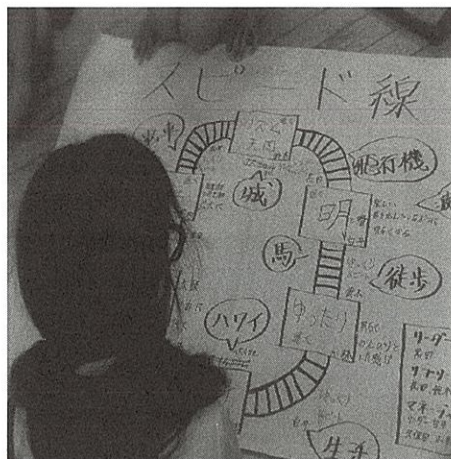
第一次のくどのような運行計画を立てると〇〇線のイメージが伝わるのかな？>では、自分のグループでは、どのようなテーマの駅メロディにするかについて考えさせた。子どもは、ストーリーがあると駅から駅への接続に意味づけができ、楽しく演奏ができること、また、演奏表現は変化をはっきりさせる方が伝わるのではないかという判断をした。自分のグループでの音楽表現に対する思いや意図は、模造紙に書かせ、音楽表現については赤色で、その曲のイメージについては、青色と区別させた(資料3)。

ここで特に意識したことは、一人一人の子どもの音楽表現に対する思いや意図を、言葉で交流させることであった。グループごとの運行計画のプレゼンでは、つくったストーリーが駅ごとにどのように展開していくかを説明させた(資料4)。一定のきまりの中で、友達とは異なるより豊かな表現を求めていくには、つくろうとする音楽に、自分の思いをもたせることで、演奏表現に違いが生まれ、オリジナリティを感じさせる演奏になると予想した。

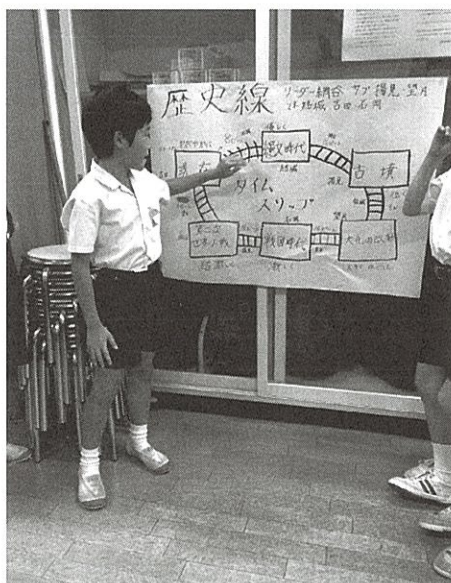
このプレゼンでは、自分の駅のイメージが抱けないところがあったグループは、表現したいことが言葉ではっきりと説明できるまで話し合いをもたせ、軌道修正をくりかえした。それは、子ども一人一人が考える駅のイメージがつながってこそ、〇〇線の駅メロディが完成すると意識させたいと考えたからである。

第二次では、駅メロディの音楽づくりに入った。音素材としては、ドラムセットのみとし、駅の演奏には4分の4拍子、4小節16拍という一定のきまりをもたせた。それは、子どもが、どのような意図や思いをもって創意工夫していたかを、見取るために有効であると考えたからである。

また、グループの運行計画を立てる活動や、イメージに合った演奏を創意工夫してつくっていくプロセスにおいて、互いの思いを伝え合ったことは、子どもの音楽表現に大きく影響を与えたと感じている。特に、駅の部分の音楽づくりでは、今まで既習してきたドラムセットのパターンをあてはめて演奏しても、イメージした音や音楽に聴こえてこないことや、ド



資料3 互いの思いを伝え合い、グループの運行計画を立てる姿



資料4 グループの〇〇線の運行計画をプレゼンする姿

ラムセットを構成している一つ一つの楽器で、音色や奏法を創意工夫し、音楽をつくらないとイメージに近づかないことを、互いに思いを伝え合うことで、明らかにしていった。また、イメージを具現化するには、自分の思いを言葉で指摘することだけでなく、実際に演奏の仕方を表現し、アドバイスをくりかえすことも、とても有効な手だてであった。

本実践の子どもの作品から、子ども同士の言葉や演奏表現を往還することは、子どもの発想の転換や、新たな発見への気付きになると実感した。また、その積み重ねの先には、子ども同士の信頼関係が芽生えることや、より発想が豊かで楽しい音楽表現が生まれていくことを、子どもの感想や活動の様子から、成果を感じることができた。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

6年生「駅メロディをつくろう」の実践から

この題材の第三次では、各グループのまとめの演奏の聴き取りをして、それぞれのグループの表現について、思ったことや感じたことを評価し、三色の付箋に記した。(赤色は音楽表現、青色はイメージ、黄色はその他)



資料5 演奏の評価を分析する姿

各グループの模造紙に貼りつけた付箋を分類することは、自分のグループで考えた〇〇線のイメージが伝わったかを振り返るだけでなく、友達の意見を取り入れて、さらにこれからの音楽づくりに生かす気づきになると考えた(資料5)。

子どもは、付箋に書かれた内容を分類することで、自分たちの演奏がどう聴こえていたかを分析することができた。友達の感想やアドバイスには、自分たちでは気付かなかった意見がたくさんあり、すぐに演奏に生かすことが出来た。何より、自分たちが意図した表現が友達に伝わっていた感想や以前の演奏と比べて変容し、

より伝わるようになったという感想には、子どもの喜び合う姿が多く見られ、意欲や表現力が高まることから、この手だては、効果的であった。

また、友達からの感想は、自分自身の表現を見つめなおすきっかけとなった。与えられた音素材から、自分のイメージを表現する難しさや音素材をどのように組み合わせて、イメージに近づけてきたかなど、完成までのプロセスを振り返ることができ、変容が認識出来た。模造紙に書いたグループの運行計画については、演奏表現を改善してきた履歴が残っていることから、題材を通してのふりかえりは、有効にはたらい(資料6)。

駅の名前が「走れ」という、とても抽象的な名前だったから、それをドラムセット一本で表すのは、大変だった。

だけど、ドラムの音と「走れ」のイメージを結びつけて表現する過程が楽しかった。何かを音楽で表すことは、7種類の音をどういうふうに、どのドラムを、どのタイミングで演奏するかは無限に組み合わせがあるし、終わりのないことだけど、それを創造するってことが何か奥の深いところに足を踏み入れたようで、ワクワクしたし、大変だと思いました。音楽の授業では、単に技能を育てるのではなく、心を豊かにしているのではないかと今回の授業でわかりました。

資料6 自分の成長を認識しているふりかえり

今後に向けて

これらの実践をもとに、「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だてを再構築し、音楽活動の展開に生かしたい。

(1) 感動やあこがれを感じさせる音楽との出会い

4年生の「拍の流れにのって リズムを感じとろう」の実践では、演奏の内容や構成も素晴らしく、4年生の子どもの心情に寄り添った楽曲に出会わせたと感じている。特に、この実践では、子どもが映像の中の主人公に抱いたあこがれは、現在、自分が取り組んでいる地道なドラムセットの基礎・基本の構築がとても大切であるということに気付かせるきっかけとなった。また、その後に取り組んだ課題に対する意欲や行動にも、前向きな変容があったことから、感動やあこがれを感じさせる音楽との出会いでは、今後も子どもの知的好奇心が揺さぶられるような作品を精選し、出合わせることが効果的だと考えている。

(2) 互いの思いを伝え合い 表現の交流をさせる

6年生の「駅メロディをつくろう」では、子どもは必ず一曲、駅の音楽をつくり、それをつなぐという必要感をもたせた課題設定をしたことで、互いの思いを伝え合う場や表現の工夫を交流することが、自然な形でできた。このことから、題材の中では、表現の交流ができるような場を、意図的に設定し、実施することが必要だと感じた。また、子どもは友達との交流をさせることで、より自分の考えがまとまり、言葉や音でしっかりとイメージを表出させることができた。手探りで表出していた音は、表現の交流によって、音楽として構成されていくきっかけとなり、より表現力が高まることにつながった。一定のきまりをもたせて音楽づくりすることや交流する観点をはっきりさせることは、子どもの活動に対する意識や行動が能動的となり、学びが楽しく、活性化するという成果を今後に生かしたい。

(3) 成長が自覚できる場を設け 変容を認識させる

6年生「駅メロディをつくろう」では、四点についての成果を感じている。一点目は付箋を使って、子どもからの評価を示し、学級の子ども全員の意見を反映させ、演奏の変容を自覚させたこと。二点目は、ふりかえりの感想を適宜書かせることで、自分の成長を自覚できたこと。三点目はグループの考えを模造紙のワークシートに書き、イメージや演奏表現についての考えの変容がわかるように、履歴を残したこと。四点目に、題材についての意識調査を兼ねたアンケートを実施したことである。そのことをもとに、子どもの意識や思考に添った題材構成に生かすことができると実感したことなどが挙げられる。

これらの成果については、その学年の実態や題材に応じたやり方を模索し、実施したいと考えている。また、今後は、演奏表現の変容を認識させるために、録音、録画を利用して、自分の成長を自覚させていくやり方が、有効にはたらくようにしたい。

その他として、今回、この題材の最後に「音楽づくり」に関するアンケートを行った（資料7）。この結果をもとに、授業改善に努めたいと考えている。また、子どもにとっては、成長が自覚できる資料とし、「音楽づくり」への意欲が高まり、意識の変容が認識できるようにしたい。

1. 音楽をつくる活動のとき、自分のイメージや思い、場面や様子などを音や音楽で表現することはすきですか。
2. 音楽をつくる活動のとき、自由な発想を生かして、いろいろな表現を楽しんでいますか。
3. 音楽をつくる活動のとき、音のひびきやその組み合わせを工夫していますか。
4. 音楽をつくる活動のとき、友だちといっしょに活動することを楽しんでいますか。

この4点を挙げて、変容の分析を行う。

（内容については、平成20年度特定の課題に関する調査（音楽）抜粋。国立教育政策研究所課程研究センター編）

資料7 アンケートの内容